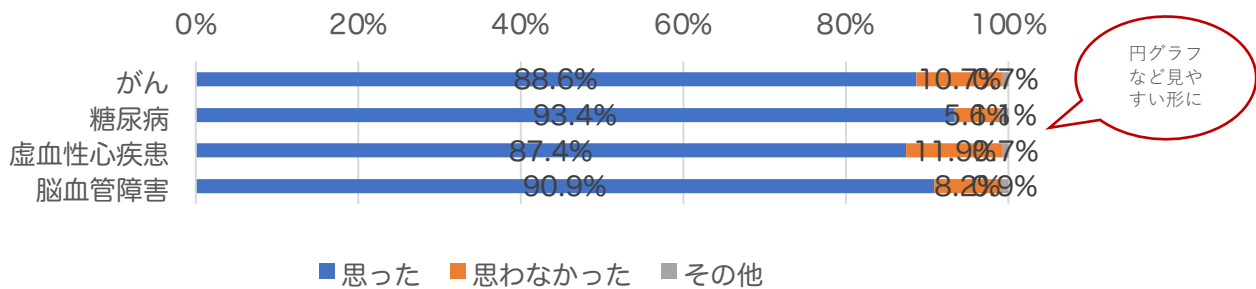


# 仕事を持つ患者さんに接する医療職の方にぜひ、知っておいてほしいことから

## 患者さんの多くが、「仕事を続けたい」と願っている

がんや糖尿病、虚血性心疾患、脳血管障害と診断された患者さんの実に9割近くが、診断当時「仕事を続けられるのであればつづきたい」と思っています。



その理由は、“生活を維持するため”との回答が多くを占めますが、“その仕事が好きだったから”や“勤めていた職場・会社が好きだったから”といった、患者さんのアイデンティティに関わる回答も。“再就職は難しい”という声も3割を超える患者さんから上がっています。

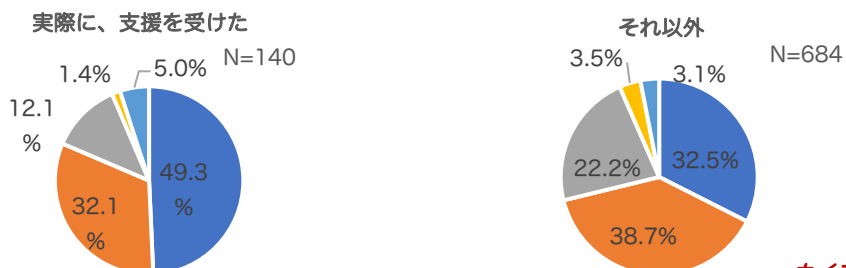


## 医療機関における支援は、患者のその後の納得度に大きく影響

もちろん、疾病の状況や職場や仕事の状況・内容も様々で、すべての患者さんの希望がそのまま満たされるわけではありません。一方で、医療機関における“治療しながらどのように働けるか”に関する支援が、患者さんのその後の納得度に大きく影響することがわかっています。

例えば、“病状を踏まえ、仕事の継続が可能かどうか、可能な範囲はどこまでかについての話し合い・助言”は、支援を受けた群が受けていない群に比べ、“十分に納得している”割合が大きく増加しました。また、“困りごとの整理やわからないことへの説明・助言など、自分の考えを決めるための支援”なども、非常に有効であることがわかっています。

【病状を踏まえ、仕事の継続が可能かどうか、可能な範囲はどこまでかについての話し合い・助言による患者の、その後の仕事の状況に対する納得度】



カイ二乗検定： $p < 0.05$

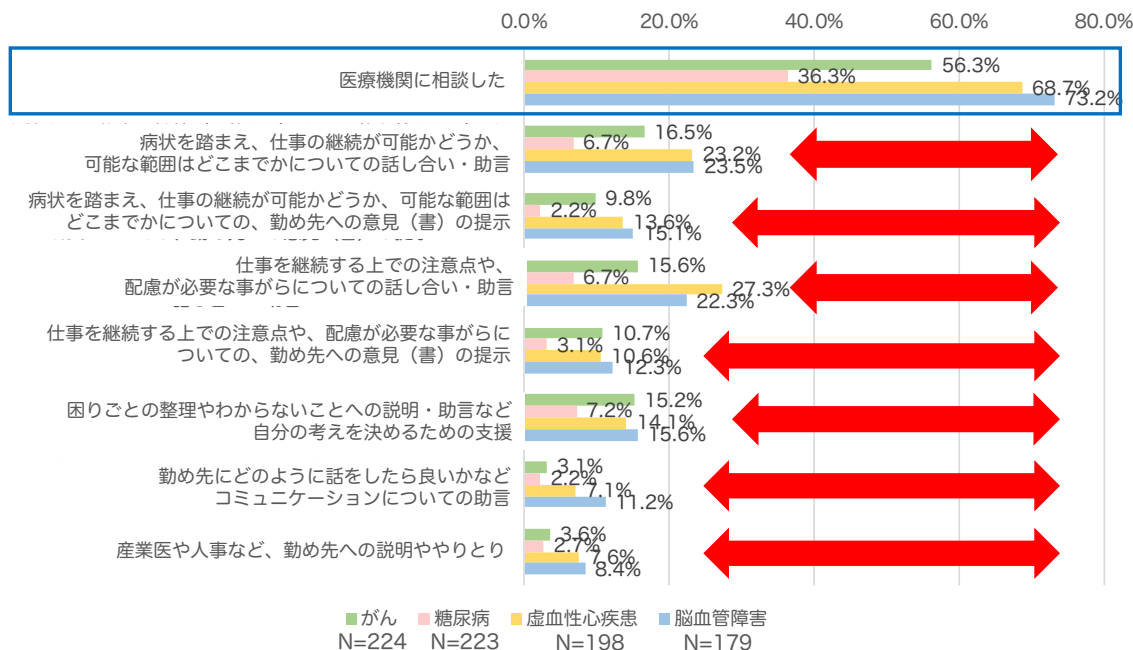
■ 十分に納得している ■ まあ納得している ■ わからない・どちらとも言えない ■ あまり納得していない ■ 全く納得していない

# 相談しても、必ずしも“具体的な支援”にたどり着けていない

“仕事の継続の可否や継続するとしたら必要な配慮”について、医療従事者に「相談した」と考える患者は多く、虚血性心疾患・脳血管障害では、7割程度にのびります。

一方で、具体的な話し合いや助言、支援につながった患者は、その1/3にも満たないのが現状です。

【仕事の継続に関する医療機関への相談と、医療機関から受けた具体的な支援】



実際、“相談”だけでは、その後の納得度に大きく影響しないことも分かっており、相談の先の具体的な支援が必要な様子がうかがえます。



## 具体的な支援を、どのように行うか？

とはいえ、患者さんの治療と仕事の両立に関する支援は多岐にわたり、一つの職種・担当で全てに対応することは困難です。患者さんの職場環境や業務内容についての情報収集や、治療の状況と体調、治療の副作用や生活上の注意点など、多くの考慮すべき点があり、チームによる対応が不可欠となります。

関係職種がどのように連携すべきかを、「医療機関における治療と仕事の両立支援導入ガイド」（平成30年度労災疾病臨床研究中村班「医療機関における両立支援の取り組みに関する研究」）（3）診療科内のチーム編成（Pxx）にまとめていますので、ご参照ください。

## 必要な人が、みな支援につながっているか？

仕事の継続の可否や継続するとしたら必要な配慮などを“相談しなかった理由”を訪ねてみたところ、“特に相談するのを感じなかったから”との回答が多数に上る一方で、“病院で仕事の継続に関して相談できると思わなかったから”、“相談しても、役に立つアドバイスが得られると思わなかったから”といった相談機能についての周知不足や、“誰に相談していいかわからなかったから”、“何をどのように相談していいかわからなかったから”といったアクセスにおける障壁も見られます。

### 【仕事の継続の可否や継続するとしたら必要な配慮などを相談しなかった理由】

相談しなかった理由	がん	糖尿病	虚血性心疾患	脳血管障害
n	98	142	62	48
特に相談するのを感じなかったから	71.4%	75.4%	85.5%	62.5%
病院で仕事の継続に関して相談できると思わなかったから	17.3%	5.6%	11.3%	8.3%
相談しても、役に立つアドバイスが得られると思わなかったから	10.2%	6.3%	8.1%	12.5%
誰に相談していいかわからなかったから	6.1%	1.4%	1.6%	14.6%
何をどのように相談していいかわからなかったから	7.1%	7.7%	12.9%	10.4%
相談しようとしたが、相手が忙しそうで相談できなかったから	2.0%		4.8%	
入院中や通院中は他に考えることが多く、仕事の継続に関してまで気が回らなかったから	4.1%	.7%		4.2%
病気や治療によって、仕事にどのような影響が出そうか想像できなかったから	4.1%		3.2%	2.1%
治療を受けつつ仕事を続けることができると思わなかったから	2.0%	.7%		4.2%
その他	2.0%	3.5%		6.3%
わからない	8.2%	11.3%	1.6%	8.3%

こうした患者さんの、表には出てきにくいニーズを拾い上げるためには、例えば、問診の際などに、患者さんの就労状況を確認し、就労継続への希望、勤務情報の聞き取りを行う、患者さんが就労していることが分かった場合、患者さんが抱える就労の悩みを見逃さないようにするなどの、きめ細やかな対応が求められます。

また、“特に相談するのを感じなかったから”と感じている患者さんも、具体的な困りごとや支援がイメージできていないだけであることも考えられます。治療と仕事を両立するために、医療機関で支援できることを具体的にお伝えすることが重要です。

患者さんに治療と仕事の両立支援を知ってもらうために、厚生労働省や各都道府県の産業保健総合支援センターが様々なチラシを準備しています。また、「●●●のリーフレット」（平成30年度労災疾病臨床研究中村班「医療機関における両立支援の取り組みに関する研究」）なども、是非ご活用ください。

### 支援が必要な患者さんを拾い上げる上での3つのポイント！！

1. 仕事をしているか、続けたい気持ちはあるかの確認
2. 医療スタッフが、病状を踏まえた上で、仕事の継続についての相談に乗る体制があることの周知
3. 担当者（両立支援や相談支援の担当者、または主治医）への連携と、関係者における情報共有

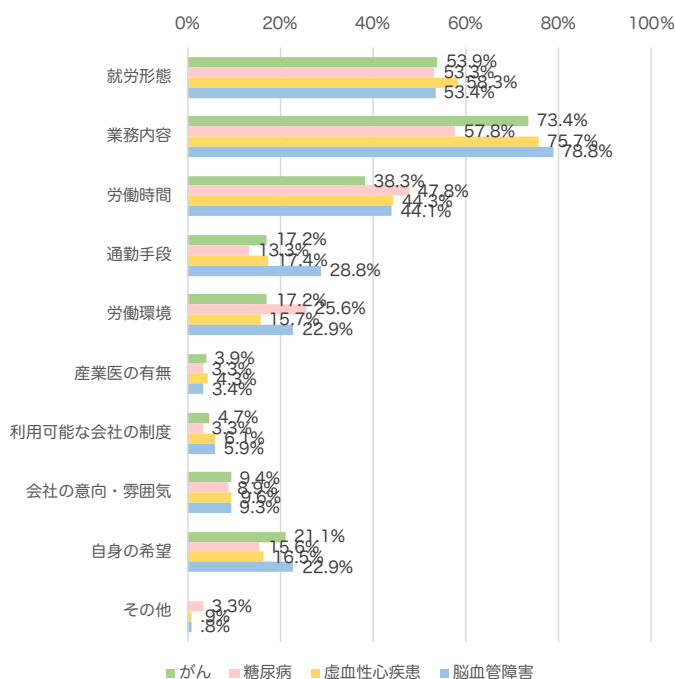
ガイドで紹介している重要な3つのポイントを  
確認

## 治療と仕事の両立支援のために必要な情報の収集

現状、患者さんが医療機関に“仕事について話した内容”としては、“業務内容”や“就労形態”が5～6割を占め、“労働時間”が4割程度でした。一方、“労働環境”や“通勤手段”については3割に届かず、“自身の希望”を話した人も2割程度にとどまっており、全てのケースにおいて支援に必要な十分な情報が集まっているかは、疑問が残ります。

もちろん、患者さんの病状や状況によって、どのような情報が治療と仕事の両立のための支援に役立つかは異なりますが、状況に応じて、より多くの情報を支援位役立てて下さい。

【医療機関で仕事について（職場環境や業務内容など）話した内容】



“通勤や移動がなかった”は、患者さんが一番の困りごととしてあげていますが、治療中にはなかなかイメージしにくく、通勤手段について話をした人の割合も限られています。医療従事者は、患者さんに起こりうる困りごとを先取りし前もって尋ねるとともに、患者さんが準備を整える手伝いをすることも重要です。



今後、就労年齢の延長に伴い、仕事を持ちつつ病気になる患者さんはどんどん増えてきます。また、国としても、患者さんの治療と就労の両立を支援する流れにあります。

一方で、当面は患者さんや受け入れ側の企業にとっては初めての経験となることも多く、その中で、どうすればより負担が少なく治療と仕事を両立できるか、医療スタッフのサポートが果たす役割は極めて大きいと言えます。

本チラシが、仕事を持ちつつ診断を受けた患者の実態理解の一助となれば幸いです。

### 参考文献